小田原史談

第 104 号

発行所　小田原史談会

小田原市南町2-3-21

定期総会の報告

杉崎正五

桜花爛漫の四月十二日午後一時より城内市立図書館二階で昭和五十六年度定期総会を行いました。終了後二時三十分より横浜市史編集員俳諧史研究の大家石井光太郎先生の小田原と相模の俳壇と題し四時三十分迄講演して頂きました。

相沢栄一氏議長のもとに行いました総会の概要を次に列記します。

史跡廻り六回

総会及講演会

四月二十七日　定期総会及中野先生の山上宗二についての講演会

八月十六日　駒沢大教授文博杉山博先生の小田原北条氏の新研究と題し講演会

理事会は毎月一回

会報四回紙数八枚

昨年迄は毎回一枚づつ六回発行して居りましたが送料節約の為今年は四回にして枚数を八枚に致しました

昭和55年度決算書

収入の部	
繰越金	311.398円
会費	1.049.000
市から補助	24.000
預金利子	14.020
雑収入	33.000
計	1.431.418

支出の部	
通信費	256.970
会報印刷代	258.000
特別原稿料	0
講師謝礼	55.000
交際費	37.000
事務用品	25.745
事務手当	300.000
期末特別手当	70.000
会議費	52.580
雑費	18.300
特別事業費	20.725
計	1.094.320
残金	337.098円

昭和56年度予算書

収入の部	
繰越金	337.098円
会費	1.000.000 (2.000×500)
市から補助	24.000
預金利子	5.000
雑収入	10.000
計	1.376.098

支出の部	
通信費	350.000
会報印刷代	300.000
特別原稿料	50.000
講師謝礼	50.000
交際費	40.000
事務用品	30.000
事務手当	300.000
期末特別手当	70.000
会議費	60.000
特別事業費	50.000
雑費	50.000
予備費	26.098
計	1.376.098円

次に史跡めぐりの報告をします

五十五年四月二十一日

◎源頼朝挙兵八〇〇年祭記念石橋山合戦遺跡めぐり

収入　一五四〇〇〇円
支出　一四三一〇〇円
残高　一〇九〇〇円

六月二十三日

◎遠州史跡めぐり

収入　一六二〇〇〇円
支出　一八一二五〇円
残高　△一九二五〇円

九月二十九日

◎第四回市内仏像仏画見学

収入　一二二五〇〇円
支出　一一三〇〇〇円
残高　九五〇〇円

十一月一日

◎戦国武将展と西湘仏像展の見学

会費各自負担

十一月十六・七日一泊

◎両毛探訪めぐり

収入　八六八二〇〇〇円
支出　八二二五五〇円
残高　四五六五〇円

五十六年一月二十五日

◎初詣東京都内

収入　一八八一〇〇円
支出　一七六七〇〇円
残高　一一四〇〇〇円

収入計一四九七四九八円
支出　一四三六六〇〇円
残金　六〇八九八円
昨年度繰越金　一四二四七二円
合計　二〇三三七〇円
次年度繰越

以上で本年度決算と予算の報告を致しましたが特別会計の繰越金から会報及総集編に一部流用させて頂く事を御見留頂きました。

それ故出来るだけ多くの会報を送りたいと思いますので原稿を御送り下さいます様お願い申し上げます。

後北条氏秘話 (10)

石垣山一夜城の悲劇

中野敬次郎　執筆

茶人山上宗二の生涯 ……（四）

㈠小田原における千利休

千利休が小田原に来たのは天正十八年（一五九〇）の四月で、もちろん豊臣秀吉の小田原北条征伐の時、太閤の身辺に扈従して来たのである。そして四月一日にはすでに湯本の早雲寺にはいっていたのである。更に北条氏が滅び、秀吉が小田原を発して奥州平定に出たのは七月十七日で、利休もこれに従ったのであるから、この間利休が小田原に滞留したのは、実に百八日間の長きに亘ったのであるが、住居は殆んど石垣山一夜城の中であった。

秀吉はこの年五十三歳で茶道趣味の絶頂期であったので、この長陣の間には秀吉の周辺では毎日のように茶席がたち、また諸大名主催の大小の茶会が催され、利休がその席に出ないことは稀であった。

この戦に従軍しているのは、京都留守居役の加藤主計頭清正を除いて、秀吉腹心の諸将はもちろん、天下の諸大名が大方来陣しているのであるから、側近の代表者の一人であった利休がこれら諸将達との接触、交渉も度々あったし、それに五月に入って淀君がほかの三愛妾ともども多数の女房衆を引具して、賑々しく小田原入りしてからは、利休の身辺は毎日忙しかった。

秀吉の石垣山の構築の豪華であったことは、六月に家康の家臣榊原康政が小田原から京都の加藤清正に送った書状の中に

「上様ノ御陣ハ西ノ高山（石垣山）ノ頂上ニ十丈余ノ塁石ヲ築キ、箱根山ヲ連ネ雲ヲ穿チ、敵城直下ニ御覧ナサレ候、御屋形ノ造り

様ノ広大ナル有様凡ソ聚楽大阪に劣り難シト相見へ候」とあって、京都の聚楽第にも大阪城にも劣らぬほどのものだと述べている。多少の誇張があるにしても目を驚かす豪華なものであったことが想像できるが、その中に茶室もここかしこに設けられたらしく、同書翰の中に

「高広トシテ大ナル屋形モ之レ有リ、細少ニテ奇麗ナル屋形モ之レ有リ、松竹ヲ植エ、草花アッテ、好ミノ野菜、茄子、大角豆（ささげ）、蕪等ノ作ル所之レ有リ、惣ジテ色々ノ植木、書院、数奇屋目ヲ驚カシ候」

とある。

一夜城内での盛んな茶会の有様については、やはり「太閤記」の中に「或る時は数奇屋をあらましう囲ひなし、橋立の御壺、玉堂の御茶入れを飾り、家康公を請じ入れ、相客に細川玄旨斉、由己法橋、利休居士、或る時は信雄卿、忠興、氏郷、景勝、羽柴下総守などに前波半入を加え、御茶を賜はりしが、十六才、十七才二十計りなる青女房に給仕をさせ、種々の名酒を以て数興を尽し、右の若き輩に杓を執らせつつ小唄を所望せよかしと宜ひしを、幸に半人を差し出し、一ト節望み侍りしに、声麗はしく謡い出でしかば、満座一入浮きやかに、長陣の労を奪はれたるように、われから無く見えしを、殿下見給い、立って踊れよ踊れよと仰せしかば、四、五人立ちつつ手にて踊り侍りければ、金の扇の匂ひいとけやけきを十本計り取り出し給い玉へば、一入その品いや増し、座中薫し渡り、トンドロ、トンドロ、トドロナル釜モトドロナル釜モ、湯ガタギル、タギルヤタギルと謡ひしかば御釜の蓋も湧き返へり、拍子を合する様になん有りし、まことに自然なるべし」と書いている。

秀吉は、石垣山の本陣内ばかりでなく、箱根の湯本や底倉にても、また時々諸侯の陣屋を訪れて茶会を催したらしいが、中でも天正庵茶会というのが、知られている。

天正庵というのは、現在の小田原市江ノ浦の大野家にある遺跡で、秀吉茶会の場所として伝わっている。

「新編相模風土記」に

「天正庵。　村民与兵衛（大野家）の庭中に有り。広さ方二間の内に礎石今尚ほ在せり。天正小田原の役に諸将長陣の労苦を慰めんがため、豊臣秀吉この庭中に数奇屋を構え、石垣山の陣所より此に来臨あり、自ら茶を点じて諸大将を饗応ありし所なり。故に後来、天正庵の号を授けしという」とあるが、今もこの大野家に秀吉の遺品として、碁磐一面と碁石数十とが残っている。碁磐は（長一尺四寸六分、横一尺三寸五分厚さ三寸三分、足高四寸一分）、まことに古色あって当時のものに違いなく、特に碁石が工製であって珍しい。太閤が諸将に対局した時に用いたものだと言はれている。

利休の小田原百日間は茶席や、茶会で多忙であったしかし何故か利休はこの間楽いし日々を送っていないのである。

この戦のとき利休愛弟子の一人吉田織部は、秀吉所属の一将として関東各地の北条方の城を攻略していたが、小田原在陣の師利休との間にしばしば手紙の交信を行い、また和歌を詠み、師の見参に入れ、また師のすすめに従って竹の花入れを切って小田原に送って来ている。

これに対して利休も返信しているが、その中で有名な「武蔵鐙の文」というのがある。

織部が天正十八年の六月武蔵の忍城の攻略に加わっている時、送ってきた手紙に、「むさしあぶみさすがに道の遠ければ、問はぬもゆかし問うもうれしし」…と一首の歌が添えてあったのに対して、利休はその返信のはじめに、「御音信とだえとだえずむさしあぶみさすがに遠き道ぞとおもへば」と返歌をしるしているで「武蔵鐙の文」といみじくも言われるようになったが、その長い返書の中で、

貴殿は私の今の境遇をたたえ、自分は戦塵の中にあって静かに茶の湯をたてる暇もないと言っているが、隅田川、武蔵野、筑波山と名高い名所の眺めに堪能されている貴殿の方がうらやましい、私の今日日頃の生活は、ただ富士山の頂を眺めるだけで我慢するより仕方がないのだ」と書いている。そして利休はそのあとに蠅のうるささに関する二首の狂歌を書き、「もとはいやであった蠅打ちの音を今は慰めに聞いて暮す身となった。蠅と称する曲者がいなかったら、小田原にだってどうにか住めるだろうが」と書き続けているのである。

この手紙を読む限り、そこはかとなき利休の憂愁の気が漂っていて、石垣山での利休は決して楽しい日々でないことがうかがわれる

この手紙の往復は山上宗二事件の直後のことであったことに気付くと意味が大変深いように思われる。

利休は小田原に下ってきたとき、愛弟子宗二との再会を期待し、またその時、自分が仲介者となって秀吉と宗二の対面を実現させ、そこで両人を和解させて、もう一度宗二を秀吉に奉仕させようと、相当の決意をもって来ていたのであったと思う。

この側近政治の大家は、小田原着後早々その点は抜かりなくやって、細川忠興や板部岡江雪や皆川広照などと計って、秀吉、宗二会見の大詰までは事が運んだが、土壇場に来て、全く意外な結果になった。愛弟子宗二は血みどろなみにくい死体を師匠の前に転ばしたのである。

吉田織部の便りに対してかってない長い返事を書いたのは、久方ぶりの閑日月がさせたものではない。

利休の欝々たる石垣山の悩みの生活の中からにじみ出た思いであったのであろう。

私はこのところで是非引用したい一文章がある。それは千利休の研究家である唐木順三氏の書いた「千利休」という書物に、千利休の死について次のように述べている点である。

「利休は一般に、東山流即ち能阿弥、空海、道陳とつながる書院台子の茶と珠光、紹鷗とつながる草庵の侘茶との、統一者といわれている。利休におけるこの統一の仕方はどのようなものであったろうか。桑田忠親氏はその「乱世の茶道」の中で、秀吉対山上宗二のドラマを書いている。このドラマは案外に事実を穿っているようにみえる。天正十一年正月に催された山崎妙喜庵の茶会の折、茶はいづれが真で、いづれが草であるか、という問題が秀吉から出された。秀吉みずからの主張は「さる年われらが信長公の御前にて宗易（千休）より受けし口伝には、茶の湯は台子が根本なり。真の台子を知らずば、行の風炉もなしがたく、草の炉もなすべからず、とあったが、いかがじゃ。そちは宗易の一の弟子ではないか」というのである。

これに対する宗二の答えは「さようでござります。しかし信長公御他界いらい世情はとくと変り申した。われらの茶湯は炉の薄茶をたつるが専一なり。これを真の茶という。世上濃茶を真と云うは非なり。台子四ッ組、小壺の大事も濃茶の中なり。共に真の茶にあらず」

こういう秀吉に対する抗弁を利休は「差出がまし。

ひかえられよ」と圧えられてしまった。もちろんここには、秀吉の怒りがどのような結果を招くかを考え、愛弟子の宗二の生命をかばおうとする計らいがあったに違いない。然し秀吉に仕える限り、利休は案外に「ひかえられよ」という仲裁者の場所に、ひとつの安定を得ていたのかもしれない。

秀吉からいえば、書院台子の茶が本式、院茶は略式である。それは利休も表向きには肯定していることである。宗二からいえば、草庵の侘数奇こそ根本で、書院の大名茶は末葉である。これも利休から直々に教わったことである。利休は秀吉に対しては書院、宗二には草庵というところにいた一徹者の宗二が秀吉の怒りにふれて耳と鼻を削ぎ落とされたというのも、師説をまげなかった結果と言ってよい。

秀吉対宗二の場合には、仲裁者であった利休に利休自らけ自己の態度を決定しなければならぬことになった。秀吉対利休という対立においては既に仲裁者はない。利休の切腹はまぬかれがたい運命であったろう」

以上が唐木氏の説くところであるが、私もまた同一意見である。

利休はもちろん草庵の侘茶を茶の根本と信じているから、二十年間もの弟子である山上宗二に対してはこの教えで終始していた。だから、利休信奉の第一人者である一徹者、剛直者の宗二は秀吉の権力を持ってしても屈するものではなかったのである。

利発者で政治家である利休は、一方では秀吉に対しては書院の大名茶を容認して、巧に両面の茶道の上に立って今日の最高の位置を築き保って来たのである。しかし石垣山における山上宗二の一件は、利休へのショックは余りにも大きいものであった。仲裁者の任を感じて或る決意をもって小田原に下向した利休は、遂に仲裁者になり得ず、施す術もない瞬間に宗二は殺されてしまった。自分の信念真条を終始守り続けてくれた愛弟は、守ったが故にこそ非業の最後を遂げるに至ったのである。宗二の無惨な遺体を見て、利休はこの愛弟子の死は、利休自体がまねいたもののように、感じたであろう。これより後の一夜城の百日間の利休の生活には、何か憂愁なものがあるのを測々と感ぜられるようになっていた。

山上宗二の死は茶道の本質そのものについても、たしかに草庵の侘茶か書院の大名茶かについて、二者択一を利休自体が決定しなければならないところへ迫って来たのでてる。

秀吉と利休との心のつながりの中に暗い影のさすような現象があらわれてきたのも、石垣山一夜城在陣中からであった。

このような事情の中に、全くの虚説であるのだが、小田原陣中で、利休が徳川家康と組んで、秀吉を謀殺しようとしたという俗説が生じた何等かの動きがあったように思える。後の利休賜死についても、小田原戦役との関係がしのばれるのである。

(二)利休石垣山で竹花入れを切る

利休は小田原陣のとき、石垣山で竹花入をしきりに作っている。

現在茶会で多く見かける花入は、胡銅、陶器、竹製の普通三種が行われているが、古くは胡銅の筒花入とか、青磁の筒花入などというものはあったが、太い竹を節切にして花入れを作ることは、桃山時代から侘び物として始まったもので、利休創造によるものであるとされている。

利休以後竹花入は幾種類もでき、名のある作品も多いが、その原型は利休の切型があたかも動かすことのできぬ定則となって、これを基本にして、これを凌駕する秀作が更に見られないのも、茶道美術の究極に達した利休の天才振りが、ここにも窺える。

利休は例の天正十八年六月二十日付の「武蔵鐙の歌入り文」の書翰の中にも、竹花入の好さを説いており各地転戦の吉田織部に各地の竹も所望している。現存する石垣山で切ったという竹花入は、伊豆の韮山が竹の名所であるので、その韮山竹をとりよせて作ったと言われている。また一説には、石垣山の陣中で兵士が枕にしている竹を見て作ったとも言われている。

韮山竹で作ったという花入は、竹を三つに切り、下から「園城寺」(一重切)、「夜長」(二重切)「尺八」の銘をつけたと言われているが、この三つの花入と、もう一つ「小田原」という作品が併せて有名である。最も有名な「園城寺」花入の銘の起こりはこの花入には作った最初から、竹の表面に干割れがあるので、世に天下三名鐘(三井寺、平等院、神護寺)の一つといわれ、通称三井寺、即ち園城寺の鐘が音の美しさもさることながら「三井寺の別れ鐘」といって、ひび割れがあるので、にれにになぞらえて竹花入に銘をつけたのである。

この花入は利休が小田原戦役後京都に持ち帰って、子息宗旦に土産にしたものである。

後に或る日、宗旦がこの花入れを使って茶事を催していたところ、床の間の中釘にかけていたこの花入の一筋の干割れから、水がにじみ出ているのを見て、弟子があわてて宗旦のところにかけつけてその話をすると、宗旦は動じもせず「あの花入は水がにじみ出るところによさがある」のだと答えた。この花入は千家から後に本屋了我の手に入り松平不昧公が了我から買入れたとき二百五十両を投じたというから、いかに貴重なものとして評価されていたかがわかる。

今は松平家から国立博物館に寄贈されているから容易に見ることができる。

「夜長」の銘は、竹の節と節との間をよとと呼んでいるが、その間隔が長いところから「夜長」の字をあてて銘としたものである。

「園城寺」に比すべき名作と言われているのが「尺八」であるが、これは、一休禅師の「楽器尺八ノ頌」から名付けられたのであるが、一休和尚の偈は

自従截断再頭来
尺八寸中通古今
吹起無生真一曲
三千里外絶智音

とあって、この故事から銘名したといわれる。

一尺足らず(二八cm)の逆竹の花入れで、一節を真ん中より下目にのこし、花窓はなく、後方に釘穴をあけただけの最も簡素というより、無造作なものである

この利休「尺八」は作って直ちに秀吉に献上したので、その時、命名の由来を聞かれたので、右のような話をしたところ秀吉も大いに喜んだというから、石垣山でも使用されたと思われる。後に利休自刃のあと、秀吉が再び用なしと言って投げうって、壊してしまった。これを山岡宗無がもらいうけて直したというのが現在に伝来している因念付きの名器である。

以上三本の竹花入が、利休が石垣山で一本の竹から作ったものとして有名であるが、この他に利休が同所で作ったものに「小田原」(一重切)と呼ぶ竹花入がある。

これは元来、大徳寺の古渓宗陳への土産にしたものなので、利休はこれを京都へ持ち帰り、古渓禅師に賜ったが、この花入には今日まで、紙袋が添についてい

て「筒名小田原　休」と利休自筆の銘がかかれている

「園城寺」に似ているがそれは高さ三四cm、これは三一・六cmでやや低い。そのためか、気品、端正さにおいては、「園城寺」には及ばないが、どっしりと落ちついていて、すぐれた安定感のある、これもなかなかの名品である。

古渓禅師はこれを堺の伊丹屋紹無に賜り、更に紹無の子宗不が、京都の針屋宗春に賜ったが、贈る毎に贈主の添書が付いているので有名になった。

伊丹屋宗不から針屋宗春に贈った際の自筆の添状に

「筒の名小田原と御つけ候は、腹のぼてたるやうに有之、とての事と利休被仰由に候、小田わらと、原の字をすみてよみて候こと、我等おや申し候つる」

とあるのは面白い。小田原の石垣山で作ったから小田原というには違いないが真実はこの花入は腹のところがややふくらんでいて、はらみ女のように見えるので、原の字は清音で読んで「はら」と発音するのだというのである。

利休はこの四種の外に、石垣山で作った竹花入があるらしく、吉田織部にも贈っているようだ。韮山竹の発見によって、竹花入にとりつかれたようになったに違いないが、たまたま山上宗二事件の直後から、この侘び物の極致といわれる竹花入をしきりに作って、これを秀吉に献じ、古渓に贈り、宗旦に授けるなど、周辺の人々に次々と渡していることを、宗二惨死の問題とかみ合わせて考えて見ると、利休がこれによって草庵の侘茶の主張を示そうとしたものではないかという推察はどうか。

もう一つ、利休は自分に測々と迫ってくる不吉な運命をすでに感得していて、利休茶道の後世への形見を作ろうと精進したのではないであろうかと、憶測するのは、余りにも過ぎたることであろうか。

天正十八年七月小田原城が落城して、秀吉とともに利休も小田原を去って行った。そして秀吉の奥州鎮定にも扈従して、京都へ帰ってきたのは秋深き九月であった。

利休の賜死については、古来いろいろの直接の原因があげられている。

しかし結論的に言えば、小田原北条氏の滅亡によって、天下統一が実現したので、ここで武家政治の確立を実現するために、まず側近政治を排除し、豊臣政権の粛正工作が至急に必要となったのである。

そのため茶道を背景にした側近政治の第一人者の千利休を葬り去ることが必要だったのだろう。

極端に言えば千利休は石垣山一夜城の必要がなくなる時から、彼も必要がなくなったのであろう。況んや茶道そのものにおいても、秀吉と利休との主張が完全に離れたということになれば、秀吉にはもはや利休温存の必要がなくなったのであろう。

天正十九年二月二十八日千利休は七十年の生涯を終えて自刃した。それは彼が石垣山を去ってから僅か半年後のことであった。

香川政治載録（つづく）

千代台出土瓦を奈良国立博物館「国分寺」展に出品

富田千春

㈠出陳依頼の手紙を

春まだ浅い三月、奈良国立博物館から、いかめしい封筒の手紙が郵送されて来た何だろうと思いながら封を切ると、天平十三年（七四一）聖武天皇によって全国六十余ヶ所に建立され国の華とうたわれた、国分寺国分尼寺に関する文化財を一堂に展示する「国分寺」展を、五十五年度春の特別展として開催すべく鋭意準備をすすめており、貴殿の特別御配慮を賜わり、御所蔵の左記作品を是非とも御出陳願いたい、との丁重な手紙であった。そして記には

(1)千代廃寺出土

均正唐草文字瓦　一個

(2)同出土　鬼瓦　一個

と書いてあった。

尚このような企画は、はじめてのことであり単に、国分寺の実態のみならず、古代史、美術史、考古学などに関する基本的な資料を総合的に展観しようと志すものであるとのことであった。

今、私の資料は小田原の郷土文化館に行っておるので、次の日、郷土文化館に行き、館長さんに会い、手配等の打合せをした。

千代台に、永く埋もれていた古瓦を、奈良の国立博物館の桧舞台に展示して貰えることは大変結構なことで、早速国立博物館へ快諾の返事を出した。

聞くところによると、今回の国分寺展は、国分寺と格付けされ、伽藍配置等はっきりした寺院に限るとの事だが、千代台から出土した古瓦は、紋様、材質、焼きなど中々立派なものであるので、廃寺跡出土というのは千代台一つだけ特に展示に加へることになったという事だ。この国分寺展には千代からは、私の前記二点の他、鐙瓦二点と、瓦塔一点の計五点が出品された

㈡「国分寺」展を拝観して

開催は、四月二十九日から、六月一日までであり、前日の四月二十八日を特別招待日として御案内があり当日は記念レセプションを開くとの事でしたが、そんな忙しい日よりも、折角の機会ですので、ゆっくり拝観したいと思って、五月十五日、春雨の煙る日でしたが、雨に濡れた新緑の古都を訪れた。

博物館、特別展示室の正面には「金光明四天王護国の寺」と二行に彫りあらわした、東大寺西大門の勅額が、かかげてあり、先ず天平時代の偉容を思はせられる。

何をみても関係深いものであり、展示物の一つ、一つ興味深く拝観したが、ここでは、千代出土の展示品について記してみよう。

（a）鐙瓦（あぶみがわら）（軒丸瓦）

第一部が諸国の国分寺の古瓦であり、陳列は鐙瓦、宇瓦の創建瓦の組合せが、各国分寺毎に一ケースとして展示されている。三島の伊豆国分寺、海老名の相模国分寺に続いて「相模千代廃寺」という名称で、鐙瓦二点、宇瓦一点計三点が、特別ケースに展示されており、真白のケース内に螢光灯で美しく照られ出されたのをみて、さすが！すばらしいものだと今更ながら見ほれて、長いことその前で立止った。

鐙瓦は　軒先丸瓦という方が実感が出ると思はれるが、千代から出土した物にも、周縁　花弁、中房の紋様も色々あり、石野瑛先生は五類に分類して書いておられるが、出品は細弁の単弁蓮花文鐙瓦と奈良朝的な複弁蓮華文鐙瓦が展示されていた。

（b）宇瓦（のきがわら）（軒平瓦）

当時の寺の屋根は、行基葺の瓦屋根で、その軒先に平瓦と丸瓦とが一つずつ交互にならんで居たはずで、二種の瓦は同数あるはずであるが、丸瓦は小さな破片でも注意を引くもので、見

つけて保存され易いが、宇瓦は見出され難い為か、小さな破片迄入れても僅か数点しか出土していない。種類も重弧文字瓦と、内田武雄さんの持っておられる飛雲文宇瓦と、私の持っている均匹唐草文宇瓦の三種類しか出ていない。

それも、昭和二十六年三月二十八日、雨の降る夕方学校からの帰り、台の塚裏側の道路で、土塊の中から見つけたが、泥だらけで重いので近所の家に預けておき、明朝洗って出てきた、今まで出たことのない、巾三〇㎝程の完全に近い一番立派な宇瓦であった。

昭和四十八年、千代小学校創立百周年記念祭に是非ということで、玄関の展示ケースに出品した瓦であるが、返還されず行先不明になってしまった。

昨年の夏、県教委発行の文化財調査報告書をみて、訪れた人があり「それは千代小学校に展示されている」と申しましたら、「小学校にはない。展示ケースもない。」との事に驚き当時の千代小学校長に問い合せた所「高田の内田武雄さんの展示物も一緒であり、内田さんに連絡して、当人が取り片づけたという事であった。「展示出品者に一言の挨拶もなく、どうしたのですか」と詰問しましたが内田武雄さんは、昨年の五月他界されてしまい、色々手をつくしたが、この瓦は何処に行ってしまったか、今もって分らず、誠に残念である。

尚、この瓦は昭和四十八年一月、横浜有隣堂のギャラリーで「郷土の考古展」にも出品した物であり、又今年の八月十五日発行の至文堂、日本の美術(8)「国分寺」号にも、千代の古瓦が紹介されているが、実物がないので、拓本だけが千代廃寺跡出土軒瓦として記載されており、千代台にとっては貴重な瓦だが、今の所まぼろしの瓦になっている。

この問題の瓦がないので奈良出品したのは、一まわり小さい物だが仕方なく、同じ紋様の小生所有の、均正唐草文宇瓦を出品陳列して貰った。

(C)鬼瓦

国分寺跡からは、大棟の再端を飾る鴟尾（しび）の出土を見ないから、大棟も降棟の末端にも鬼瓦を用いたようであるといわれている。

鬼瓦には、鬼面文鬼瓦と蓮花文鬼瓦とがあるが、ここでは鬼瓦だけを一室に集めて展示されていた。前者九点、後者七点の展示があった。出土も少ないようだ鬼の面には色色特色があり愛嬌があり興味を引いたが慾目かも知れないが、千代出土の鬼瓦は写実的であり破損も少なく、精巧なもので、この中でも一段と光って居た。

千代の鬼瓦は、昭和二十六年二月五日、火の見の北側の用土掘り取り中に、地下五〇㎝の所に下伏して発見されたもので、ほぼ完全に近いものだ。写真で、武蔵国分寺址出土の鬼瓦と酷似していることを知ったが二者が同じ所に、ならべて置かれており、中々に得難い機会であった。目、鼻、歯、牙、そっくりであるが頬ひげを数えたら、千代のが一本多かった。

(d)瓦塔、泥塔

瓦塔は、大きいもの小さいもの、形もまちまちで、五点程の展示があった。瓦塔は全国でも珍らしいものであり、千代の瓦塔は、昭和二十五年十一月二十日台の塚の西側の畑で牛蒡の掘り取り中に、古瓦類と一緒に出たものである。五重塔の最上層のものと思はれ七分通りを存している正三角形に近いもので軒端は二一㎝ある。泥塔も一緒に展示されていたが、瓦塔としても千代の出土品は上質なものであった。

(e)一巡して

北は宮城県から、南は鹿児島まで八十九ケ寺の国分寺、国分尼寺の創建瓦を主にした展示で、瓦の文様に流れがあるのかと思ったが国によって千差万別であった。

平安時代には、瓦葺といえば寺を指すものという忌詞になっていると、古代寺院と瓦葺きとの関係は深いものであり、瓦屋の構立は寺院に限って用いられ、古代権力の中枢であった宮殿の屋根さえ飾ることが出来なかったと聞いている。

東国、なでも関東地方の国分寺用瓦は、種類の多いことで有名であり、北陸地方はきわめて少ないようですが、陸奥、佐渡あたりの辺境の地にある国分寺の瓦は一段と粗であり、瓦当文様は極端に簡素化されているのを見て、千二百年もの昔では、今からは想像もつかない交通関係等から、生活の程度、文化の差が大変だったろうと思はれた。

そして千代の古代瓦は前にも記したように文様、焼き、質共に中央に比しても決して恥しくない堂々たるものであると確信した。

㈢千代の国分寺説について

先日、八月二十五日発行の小田原史談会報第一〇一号に「千代国府考」として西大友の古宮万寿夫氏が、色々調査、研究の成果を発表しておられる。内田武雄さんは内田さん流に種々書いておられる。

大正時代から、戦前、戦後を通じて千代台に熱心な方に、石野瑛先生、関本の加藤誠夫氏等も居られる。

ここで発行された、前記の至文堂、日本の美術の「国分寺」誌にも、「箱根山系の東方、相模湾に注ぐ酒匂川下流域の左岸段丘上にある千代廃寺は、相模国分寺のもう一つの推定地であり、出土する瓦類は奈良時代後期初頭あたりに位置づけられる寺跡である」云々と記されている。

私は地元に居ながら、浅学菲才で、とても手が廻らないが、厚木の前場氏が数年前から千代国分寺説に取り組んで、全国に出向き、各国分寺の瓦等を熱心に研究されており、今年になっても千代に何回となく訪れておられる、今年の暮頃迄には、千代台の国分寺の著書を出版されることと思います。皆さんが一心に研究して下さる事は、地元民の一人として有難いことだと思います。

（昭和五五年九月九日記。）

酒匂鍛冶考

川瀬春雄

七浜砂鉄の採集について

酒匂鍛冶について既に述べた様に江戸時代中期をピークに四十二軒もの鍛冶業者が軒を並べ百五十年近く繁栄したが次第に衰へ幕末から明治に変るあたりにはその鎚音も絶えて静かな農村にかえって了った。しかしこの様な鍛冶の大集落が存在した事は関東方面に於て稀に見るものであったと鉄の考古学者窪田先生は言っている。では何故酒匂の地にこの様な鍛冶の大集落が生れ発展したのであろうか、その理由の一つとしてここの海岸に豊富な砂鉄が含有されていたことがあげられる。

終戦直後の昭和二十三年頃今の酒匂中学校下の海岸で磁力を持った二本の鉄ロラを使った簡単な機械で砂鉄を採集し製鉄原料としていづれかに搬出していた事があり、又昭和三十年五月頃鉄関係の企業である鋼材工業㈱と日本電化工業㈱の二社の共同によって二宮町

の海岸から酒匂川河口迄の間の砂鉄の含有量の調査が行われた。その調査データをみても梅沢、押切、前川国府津等の砂鉄の着磁率2%～4%程度に比べて酒匂中学校下一帯は6%を記録している。これらの事からみても近年に於ける酒匂海岸の砂鉄の含有状況を知る事ができる。ところでこの砂鉄と酒匂鍛冶集落とがどこで結びついていたのだろうか。之は言う迄もなくこの酒匂で浜の砂鉄を用いて鉄が造られていた事である。それは粘土で作った箱形の「たたら炉」と呼ぶ小型の熔鉱炉で、放浪の「たたら師」達の手によって始められたもので、これがやがて鍛冶の大集落へと発展したのである。砂鉄を用いて鉄を造る技術は遠く弥生時代に大陸から我国に伝わり、永い歴史を経て大正十年代に到る迄延々と行われてきたもので砂鉄は製鉄の歴史と共に採り続けられてきたものである。砂鉄には山から採掘される山砂鉄、川砂から採集する川砂鉄、海岸の砂中から採る浜砂鉄の三種類がある。古くから出雲（島根県）の山地から採掘される山砂鉄は最も良質とされ、今に残る名刀の多くはここから産出された鉄によって鍛へられたものである。山砂鉄に次いで川砂鉄は同じ島根県宍の道湖に注ぐ斐伊川の流れの中から採取されてきたものである。浜砂鉄は前二者に比べて品位は落ちると言うが全国に広く豊富に分布している鉄原料であった江戸時代になってからの中国山地の「たたら製鉄」が我国の主流を占め生産額も非常に大きかったが全国的にみると浜砂鉄による小規模の「たたら製鉄」の操業が各地で可成り行われていた様である。しかしこの酒匂の例にみる様に浜砂鉄でまかなわれていた地方の「たたら炉」の大部分は小規模。短期間に消え去って行った様であるこれは何故であったろうかを考えると。おそらく中国山地の様に潤沢な山砂鉄の供給に比べて浜砂鉄の場合は供給が追い付かなかった事が理由であったろう。

中国地方に於ける山砂鉄と川砂鉄の採取技術は時代と共に次第に進歩し乍ら現今もなお行われているもので。その技術については鉄の歴史書によっても知る事ができるが、鉄原料として山砂鉄より更に古い歴史を持っている筈の浜砂鉄がどの様な手法で採集されてきたのかこれについて歴史書は山砂鉄の場合の様に具体的なものではなく水流を利用した比重選鉱であったろうと言った程度の莫然としたものでしかない。その一例として江戸中期の鉄解説書「鉱山至宝要録」沢元重著（一六九一）の八鉄錫の事の項に「鉄は山にもあり。又浜川原などに交りて鉄砂あるを砂共に取り板にとりて石。砂をばやり流し鉄砂計溜床にて吹くなり」とあり「この様な採集法なら簡単にとれたろう」と現代の書は解説している。又砂鉄の研究者山本博氏の近著「古代の製鉄」の中にも浜砂鉄の採集については具体的に述べてはいないが立川昭二著「鉄」（学生社）の中に……先づ砂鉄探しはなかなか容易でなかったと前置きして「長唄の式三番叟の文句に『おうサヒや…おうサヒや…こうのところにありや…こうのところにありや…ほかにやらじとおんまいりそうらう…』と言ふのはサヒつまり砂鉄発見の喜びをうたったものであると言う」とこの様な記述があるここに言う砂鉄の発見とは何を意味しているのであろうか。この長唄くだりをもう一度読み返してみても水流を利用した比重選鉱のイメージは浮んではこなかった。前出「鉱山至宝要録」の言う様に水流による比重選鉱法で採ったのか或は長唄の文句の様に砂鉄は砂と分離した何等かの姿で存在していたのか文献によっても具体的には説明されたものは何も見当らなかった。

ところが去年十月十九日二十号台風が南関東を通過した。この大波に洗われた酒匂海岸に幻の浜砂鉄の姿を筆者の眼で確める事ができた。それは台風の三日後酒匂中学校裏バイパス直下の汀線から七十メートルの砂浜の表面に幅三メートル長さ六メートル、厚さ三センチ程の砂鉄層が汀線に平行して黒々と横たわっていた。これこそ自然の力によった比重選鉱と言うべきで砂鉄の自然の姿であった事をはっきりと確め得た。長唄にある砂鉄発見の喜びとはこれを言ったものであった事に違いない。では古文書に何故この事について一言の記述もなかったのだろうかを考えてみると砂鉄層の姿は余りに単純明快すぎていた為と江戸時代末期には浜砂鉄を原料とした地方の「たたら」は次第に衰退して砂鉄採集の必要性がなくなった事などから採集についての伝承がはっきり残らなかったのであろうと考えられる。

砂鉄層の採集法と言っても木製の箕と薄板二枚あれば事足りたであろう。これは筆者の実験ずみである、又既に人の足に踏まれた砂鉄層でも五〇%程度の含有量があれば手頃の箱に入れて水平に前後に運動させることによって砂は上層に完全に分離する事も確め得た猶一〇%前後の含有のものについて実験してみたが、この方法では砂鉄は分離しなかった。

近代製鉄において排出される鉄滓中の残留鉄分は一パーセントに満たないと言うのに比較して江戸時代で技術的には雲泥の相違は当然の事乍ら「たたら製鉄」による鉱滓中の残留鉄分は五〇パーセントもあり、更にこの荒鉄の二次精錬の工程で排出される鉄滓（酒匂町に散布されている鉄滓）中にも五〇パーセントの残留鉄分が認められる。結局砂鉄原料一〇〇に対して鉄材として使用可能部分は一八でしかない。この様に無駄の多かった工程と容易でなかった採集のことを考え合わせると砂鉄の貴重さは現代の吾々にも切実に感じられる。終

昭和五十五年十二月一日記

小田原市酒匂二―三八一五
酒匂神社前

百六年を迎えた吾が国鉄と外国鉄道の四方山噺

額田喜代春

(三三) これからの鉄道

鉄道は過去一世紀半の間に、すばらしい発達をとげてきて、世界中の鉄道技術者達は、鉄道がもっと速くそして、もっと多くの人や貨物を安全に運ぶことが出来るように、研究を続けており、いろいろなアイデアが発表されております。

これまでの鉄道は、レールと車輪のまさつ力を利用して走るものでしたが、この方式では、時速三百五十キロ以上で走ることは、むずかしく、最近は列車を地上から僅かに浮きあがらせて走る方式が研究されています。車体を浮き上がらせるには、下に空気を吹きつけるエアクッション方式と磁気の反ぱつ力を利用する磁気浮上方式があります。また、列車を前進させるのには、ジェットエンジンを使うものと、リニアモータ

ーを使うものとがあります。このような方法で、時速五百キロ位まで出せるといわれていますが、まだ実用化したものはありません。

重い車体を浮上させて、高速で走るには、大きなエネルギーが必要で、安全で経済的な交通機関とするには、なお一層の研究が望まれています。

フランスでは、末来のアエロトランとして、エアクッションや、磁気浮上の方式をつかった新しい鉄道は現在世界中のいろいろな国で実験がつづけられています。

そして、この方式は、最も古くから研究が進められていたもので、アメリカ、イギリス、西ドイツ、日本でも試作車で実験が行なわれています。

(三十四) 連結器のはなし

鉄道は、沢山の車両をつないで走れるという特長をもっていて、そのためには車両と車両をつなぐ連結器が必要になってきます。吾が国では、鉄道が創立されてから約五十年間、ねじ式の連結器が使われていましたが、一九二五年（大正十四年）に自動式に（国鉄）一度に切り替えられたのです。

世界的にみると一度に全部を切り替えることは、むずかしいため、自動式を使っている鉄道は、少ないのです、ねじ式は、強度も弱く、操作もやっかいで作業者が危険ですが、自動式はすべての点ですぐれておるのです。

では、自動式は大きく分けて、一般の列車に使われている自動連結器と、電車に使われている密着式連結器とがあります。

(イ) 並型自動連結器

機関車や、客車、貨車などに広く使われている自動連結器の基本形で、構造はナックルが回転する仕組みになっていて、連結器どうしが衝き当たると、自動的にナックルが閉じ、錠がおりて連結される仕組になっております。

反対に、はずす時は、錠をあげて、やれば自然に離れます。

そして、連結した時のすき間が多少あるので、長い編成の列車では、発車する時のショックが大きくなり易いのが欠点ですが、機関車に一度に重みがかからなくてすむわけです。

(ロ) 密着式連結器

国電などのように、急に加速や減速ができる電車に使うために、開発されたもので、そのため、ぴったりと密着して、全く遊びがありませんから、とても具合が良いのです。

したがって、曲線をなめらかに通れるように、上下左右に回転できるような自在接手というものを備えつけています。また、ブレーキ用の空気管も同時に、連結できるようになっていますから、新幹線の電車や、私鉄の一部の電車では、電気回路のつなぎも、同時にできるようになっております

(ハ) ネジ式連結器

昔、使われた連結器で、世界的には多くの国々で現在も使っております。

(ニ) 棒連結器

固定式編成列車のように普段、切りはなすことのないような車両に使われております。

(ホ) 両用連結器

九十度回転すれば、並型自動連結器にも、密着式連結器にも連結できて便利です。

信越線横川ー軽井沢間の電気機関車に使われています

(ヘ) 密着式自動連結器

基本的の構造は並型自動連結器と同じですが、連結した時のすき間を最少限になるように、内部を改良してあります。

(三十五) 客車内の設備

旅客車の車内記備は、気持ちよく乗車でき、また、楽しく旅行ができるように工夫されております、ですから、座席は車両の用途によって、通勤用のロングシート。中、長距離用のクロスシート、ロマンスシートリクライニングシートがあります。また、夜行列車用に寝台シートがあります。

これ等の座席は長い時間旅行しても、つかれないように、いろいろと改良されています。

ですから、空気調節設備も昔は主として簡単な換気と蒸気暖房設備でしたが、最近では、暖房装置も改良され、冷暖房装置も取り入れられております。

ですから、窓の面積も大きくなり、照明も明るくなっています。

(イ) 冷房装置

客車用の冷房装置は、始めは、特急列車だけに取りつけられましたが、最近では、通勤電車にも取りつけられるようになりました。

小形のユニットを客車の屋根の上に並べておく分散式と、大形のユニットを屋根の上か、床下においてダクト（風を送る管）で冷風を送る集中式があります。

(ロ) 暖房装置

客車は長年に亘って、蒸気機関車でひかれていたため、暖房は蒸気が使われてきた、そのため、電気機関車に変わっても、冬の間は暖房車を連結するか、小形ボイラーをのせていました

その後、交流電化で走る客車に、電気暖房が取り入れられて、特急電車や、電車と共に普通に使われるようになりました。

(ハ) 通風装置

通風装置は、客車内のよごれた空気を追い出して、外から新鮮な空気を取り入れるためのものです。

一般には走っている時の風力を利用する自然通風式が多いですが、停車中でも換気の必要な地下鉄の場合は、動力で空気を入れ替えています。

(ニ) ドアー

昭和の初めに、電車に空気力を使って、開閉する自動ドアーが取り入れられてから、その後の電車や、ディーゼル動車になくてはならない設備になっていますですから、最近では、大都市の国電や、私鉄の電車には両開きドアが多くなって一層便利になっておりますそして、自動ドアは開いたまま、発車することのないように、開いている時は、動力装置が動かないように連動になっていますから安全です。

(ホ) 座席

旅客車の車内設備の座席は、乗客の目的によって、いろいろな種類があります例えば、長距離旅行の多い特急列車内の車両は進行方向にむけて、座席の間をひろげてゆったりしていますし、通勤列車の場合は、大量の短距離の旅客を運びますから、座席はロングシートにして、立席をできるだけふやしております。

(三十六) 運転室のはなし

(イ) 運転室にもいろいろあるが 583系特急電車の運転室を取りあげてみると、電車の主幹制御器のノッチの進め方は、主電動機の電圧を、ふやしたり、へらしたりして、自動的に進むようになっています。

そのために運転士が、ハンドルを必要の処におけばノッチは自動的に進んで、予定の速度になります。

では、その各部分を次に掲げてみましょう。

①主幹制御器

走行中の速度を制御する装置です。

②主幹制御器ハンドル

主幹制御器を動かすハンドルで、右まわりにまわすと速度が上がります。

③逆転器

電車の前進、後進を切りかえます。

④交直流切替スイッチ

交流、直流区間を直通運転する時、それぞれの電流にあわせて切りかえます。

⑤ブレーキ

列車にブレーキを、かけ

る装置で、空気、電気の両ブレーキが働きます。

⑥速度計
電車の速度を表わします

⑦時刻表さし
運転時刻表などを書きこんだ時刻表をさしこみます

⑧汽笛ペタル
足でふむと、汽笛が鳴ります。

⑨ＡＴＳ確認ボタン
ＡＴＳが作動すると、確認ボタンを押します。押さないと、五秒後に自動的に非常ブレーキが働きます。

⑩⑪⑫空気ブレーキの圧力計

⑬⑭電気回路の電圧計

⑮記録式速度計
運転速度を時刻をおって記録する装置です。

(ロ) ＥＦ65形式電気機関車の運転台のはなし。
電気機関車に限らず、電気車両は、主電動機の電圧を調整して速度を制御します。
この電圧の制御は、直流電気機関車と交直流電気機関車の場合は、抵抗器を調節したり、回路をつなぎかえたりして行ないます。また、交流電気機関車の場合は変圧器のタップをつなぎかえます。

①主幹制御器
走行中の速度を制御する装置で、ノッチは直列、直並列、並列、弱界磁があります。

②主幹制御器ハンドル
主幹制御器を動かすハンドルで、手前に引くほど、速度があがります。

③逆転器
機関車の運転方向を切りかえます。

④自動ブレーキ弁
機関車と客車の両方にブレーキをかける時に使います。

⑤単独ブレーキ弁
機関車だけに、ブレーキをかける時に使います。

⑥速度計
機関車の速度を示します

⑦笛弁
テコを押すと空気笛が鳴ります。

⑧時刻表さし
運転時刻表などを書きこんだ時刻表をさしこみます

⑨ＡＴＳ警報器
ＡＴＳが働くと、ブザーが鳴り、確認ボタンを押すとブザーが止まります。

(三七) **旅客駅のはなし**
普通の駅は、旅客と貨物の両方を取扱いますが、最近では、大中都市の駅（東京駅、大阪駅、小田原等）では、旅客と貨物を分けて扱っております。
そして、旅客駅としての主な設備は、列車の発着線、側線、乗降線、連絡するための跨線橋又は地下道、駅本屋、駅前広場等があります。それから、乗降場の番号は、駅本屋の側から順々につけるのか原則になっております。

(イ) 大中都市の大きい駅では、あらゆる設備がそろっていて、いろいろの仕事を駅長、助役、運転係、出札係、改札係、庶務係、駅務係、操車係、連結係手、信号係等分担して行なっております。
なおこのほかに、駅長室、庶務室、みどりの窓口、自動券売機、旅行案内所、運賃精算所、小荷物受付所、手荷物一時預所、待合室、コインロッカー等があります。

(ロ) 小さい駅
数人しか駅員がいないので、出札、改札等いろいろな仕事を一人で行なっております。

(ハ) 無人駅
乗降客が非常に少ないので、駅員が一人もおりません。そこで、切符を発売したり、集札したりの仕事は客車内で車掌が取り扱います。

(三八) **貨物駅とヤードの話**

(イ) 貨物駅
昔の駅は、旅客と貨物の両方を扱うのが原則でしたが、最近では貨物の量がふえるにしたがって、貨物だけを扱う貨物専用駅がふえてきました。例えば、東京の汐留駅、関西の梅田駅、小田原付近では西湘貨物駅等です。
主な設備としては、構内配線と積卸し場からなっております。積卸し場は高床ホームと低床ホームがあり最近ではフォークリフト等の機械の活躍で低床ホームが多くなっています。
それから、運送の方法としては、駅留と家庭への配達扱とがあります。

(ロ) ヤード（貨物操車場）
駅で積みこまれた貨車は列車につながれて輸送されますが、貨車の行き先が、それぞれ違う場合には、列車はいったんヤードに入れて、列車を組みなおして、同じ方向または、同じ地域へ行く列車だけにして輸送します。そしてヤードの設備は、到着線、方向別仕分線、駅別仕分線、出発線等からなっています。

(ハ) コンテナ専用駅
いままでの鉄道の貨物輸送は、トラックで駅に運び駅でいったん卸して、また貨車に積み替えるというように、駅での作業に大変時間がかかりました、ところが、コンテナ駅では、フォークリフトで簡単に積み替えられて、目的地まで、そのまま運ばれますので、荷造りも簡単にすみます。ですから最近では、全国的にコンテナ専用駅がふえております。

「元号」と「西暦」の換算法

香川　政治

我々日常生活において特に歴史を学ぼうとする者には何時も元号と西暦との換算にとまどうことがある。ご存知の方も多いだろうが明治、大正、昭和と西暦の換算法が昭和五十四年七月二十六日付朝日新聞夕刊に生活専科の欄に掲載されていたので会員諸賢に参考にもなれば幸と紹介することにしよう。

元号を西暦は換算する簡単な換算法

明治の場合
明治の年数に「67」を加える。ただし一八〇〇年代と一九〇〇年代があるから答が二ケタのときはアタマに「18」を三ケタのときは答の下二ケタの前に「19」をつける。
例えば明治四十四年は西暦？年
44に67を加え答一一一となる故に一九一一年である

大正の場合
大正の年数に「11」を加えアタマに「19」をつける
例えば大正元年は西暦？年
「1」に「11」を加え「12」このアタマに「19」をつけると一九一二年となる。

昭和の場合
昭和の年数に「25」を加え、答の頭に「19」をつければよい。
例えば昭和五十五年は西暦？年
「55」に「25」を加えると「80」この頭に「19」をつけると一九八〇年となる

ところで西暦を年号にに換算するのは、逆計算になるわけだが、同じ一九〇〇年代に明治、大正、昭和があるので、ちょっと複雑になる。西暦年の下二ケタから「25」を引いて余りがあれば、それが昭和▽「25」を引くと余りがない場合、「11」を引いた余りか大正▽、「11」を引いて余りがないときは、百を加えて、「67」を引く、余りが明治また一八〇〇年代の場合は「67」を引いた余りが明治の年数となる。
それぞれの元年が前の元号の最終年と重復する点にも、注意が必要だが身につけてしまえば簡単に換算できるだろう。